

〈研究ノート〉

チューター制度の構築における課題

－アンケート調査結果からの検証－

大塚 薫

要 旨

本稿は、2010年度から2012年度第1学期における高知大学のチューター制度を概観するとともに、現チューター制度の課題をチューター活動実施後にチューター及び留学生の両者に行ったアンケート結果から検証していく。

国際・地域連携センター国際連携部門では、チューター制度の見直しを2006年度に行い、2006年度第2学期から①チューター対象オリエンテーション出席の義務化、②チューター登録制度の構築、③チューター業務連絡票の作成及び活用、④チューター対象留学生の拡大、2008年度から⑤チューター指導計画書及びチューター活動報告書の提出の徹底、⑥チューター業務実績簿の改善、2011年度から⑦チューター講習会を行ってきた。

このようなチューター制度の改善を通して現行のチューター制度を検証し、今後の課題について述べていく。

【キーワード】

チューター制度、渡日時チューター、個別チューター、アンケート調査、チューター講習会

1. はじめに

各大学において留学生の生活や学習の適応支援の一つの柱として、チューター制度が活用されている。「平成24年度第2回国立大学法人留学生指導研究協議会兼第39回大阪大学留学生教育・支援協議会」⁽¹⁾において、「留学生のアドバイジングの実践と『知』」というテーマでグループ討議が行われたが、「課題C 留学生活への適応の援助と問題への対応」について話し合ったグループでは「チューターの活用方法」について以下の7点の実践事例及び問題点が挙げられた。(1)チューターの配置、活用の仕方は、大学の規模(大規模大学の場合は部局別、留学生数が一定以下の場合はセンター一括等)、留学生の所属(大学院、学部、短期プログラム)等により異なる、(2)チューター

の役割として、学習支援、生活支援、友人交流の3点が考えられるが、どの役割を課するのかについては、大学ごとに重点の置き方が異なる、(3)役割の不明確さが、チューターの実際の活動の個人差を生み、留学生側の不満につながる等の経験を踏まえ、チューターを学習支援/生活支援の目的別に分けて運用している大学も見られる、(4)チューターを全学の公募制とし、留学生センター等が責任を持って指導している大学も見られる、(5)チューターミーティングを頻繁に実施したり、複数回のチューターオリエンテーションを実施し出席を義務付けたりする等の方法で、チューター指導を行っている大学もある、(6)チューターに過剰な負担が生じている等、適切な運用がなされていない場合は、指導教員に留学生センターから申し入れを行う事例がある。チューターを通じて留学生の問題の早期発見、対応が可能となる、(7)学習支援においては、同じ研究室の学生が担当することの重要性・必要性が高いが一方で適切なチューター候補者がすべての研究室にいるとは限らない。

高知大学においては、国際・地域連携センター国際連携部門が一括して、チューター制度の構築、運営を行っているが、当部門ではチューター制度の見直しを2006年度に行い、2006年度第2学期から①チューター対象オリエンテーション出席の義務化、②チューター登録制度の構築、③チューター業務連絡票の作成及び活用、④チューター対象留学生の拡大、2008年度から⑤チューター指導計画書及びチューター活動報告書の提出の徹底、⑥チューター業務実績簿の改善⁽²⁾、2011年度から⑦チューター講習会を行ってきた。

そこで、本稿では、2010年度から2012年度第1学期における高知大学のチューター制度を概観するとともに、よりよい留学生支援体制の構築を目指し改善を加えてきた現チューター制度の課題をチューター活動実施後にチューター及び留学生の両者に行ったアンケート結果から検証していく。その上で、今後の課題について述べていく。

2. 高知大学におけるチューター制度の概要

本学におけるチューター制度は、本学に在籍する外国人留学生に対して、アドバイザー（指導）教員の指導のもと、大学等が選定した「チューター」により、教育・研究について個別の課外指導を行い、留学生の学習・研究効果の向上を図ることを目的としている。チューターの役割としては、主に教育・研究支援であり、生活支援としては入学後の留学生活がスムーズに送れ

るようにサポートする渡日時チューターを別途設けている。そのため、「渡日時チューター」と学期中に学習の支援をする「個別チューター」は完全に住み分けられ、後者の活動はあくまでも教育・研究の課外指導が中心となる。

また、渡日時チューターは、学期の初めに、ガス・電気の手続きや官公庁への付き添い、銀行口座の開設、携帯電話の契約等の生活面のサポートを行うため、それらを経験したことがある上級学年の留学生が担当することも多い。学期中に学習指導を行う個別チューターは、主に日本人の上級学生が担当し、第1学期は4月から8月初旬までの4ヶ月間、第2学期は10月から翌年の2月初旬までの4ヶ月間が活動期間で、たいてい週に1、2度定期的に会い学習のサポートを行うよう指導している。2012年度現在、最大25時間の活動枠が設けられているが、活動の頻度や回数及び内容に関しては各チューター及び留学生並びにアドバイザー教員の計画と裁量に委ねられている。

チューターの選定方法としては、アドバイザー教員が留学生と同じ研究室に所属する上級学年の日本人学生を選定することになっているが、適当な学生がいけない場合、アドバイザー教員から国際連携部門に選定を依頼され、当部門に登録しているチューター候補者の中から留学生より上級学年で専門が一致する学生が選ばれることもある⁽³⁾。

また、チューターは活動を開始する前に、各学期の初めに開かれる「チューター対象オリエンテーション」に出席する義務があり、チューター候補者もオリエンテーションに参加することでチューターに選ばれる資格が得られる。オリエンテーションでは、具体的な業務内容や注意事項、チューター終了後の事務手続き等の説明が実施され、チューターが留学生にとって様々なことが相談できる最初の友人としての役割に加え、自らも異文化について学ぶきっかけとなり、教育的意義が大きいことを説いている。また、大学規定の謝金が一律1時間につき1,000円支給されるので、責任感を持ちチューター活動に励むよう促している。

さらに、チューター対象オリエンテーションでは、チューター活動の主要な業務内容が勉学・研究の個別指導であることを徹底させるとともに、「チューター指導計画書」を作成しチューター活動を開始する前に提出するよう指導している。チューター指導計画書は、チューターが留学生とアドバイザー教員と相談して、定期的な指導をする日時と場所を設定した後、学期を通してどのような業務を行うのか具体的な計画を立てるものである。これは、チューターと留学生がチューター活動を始める前に、話題を共有するこ

とでチューター活動に移行しやすくなるとともに、継続的なサポートを促すためのシステムの構築に役立っている。また、日本語能力やニーズに個人差のある留学生がチューターに何を求めているのかを書く欄もあるので、両者が納得の上で留学生の希望に基づいたチューター活動が行えるよう促すのに効果的である。そして、チューター活動は原則的に「チューター指導計画書」に基づいて行われることになっている。

その上、チューター活動時に留学生との間で何か問題が起こったときやチューター活動に関して要望があるときには「チューター業務連絡票」を書いて提出するよう指導している。これは、留学生とことばの問題や研究に対する考え方の違い等些細なトラブルが生じた場合でも気軽に相談、連絡するように作られたものである。しかし、現在のところ、1ヶ月間のチューター活動を実施した後に業務内容を記入する「チューター業務実績簿」を提出するのに止まり、チューター業務連絡票が提出されたことはない。これは、「チューター業務実績簿」に「1ヶ月のチューター指導活動を振り返って、問題点、指導上困難だった点、良かった点、うまくいった点等」を記入する欄を作成したこと、留学生担当窓口の担当者に1ヶ月に1度「チューター業務実績簿」を提出する際に問題があった場合連絡するためだと思われる。

チューター活動が終了した際には、チューター活動完了報告の書類とともに「チューター活動報告書」として自分の1学期間のチューター活動を総括するアンケートを提出してもらうことにしている。また、留学生に対しても日本語と英語が併記されている「チューター活動報告書」に回答してもらっている。両者とも「チューター活動報告書」には氏名を明記してもらい、それぞれのチューターと留学生の組み合わせに問題がなかったか、チューター制度の運用がスムーズに行われているかをチェックする指標としている。

2011年度からは、「チューター対象オリエンテーション」に加えて1年に1度、学期の半分が経過したところで「チューター講習会」を開催している。これは、チューターと留学生がともに参加し、「チューター活動の現状と課題」を国際連携部門の教員が説明した後、両者混合の4、5名のグループに分かれてアイスブレイキングとして各グループで自己紹介を実施した。そして、両者が打ち解けてきたところで、チューター活動に関する話し合いが行われた。テーマは、主に「チューター業務の問題点」でよりよいチューター活動とは何かを話し合いにより考えさせる内容であり、その時点までチューター活動を行ってきて双方の間にどのような問題が生じたかをポストイットに一

項目ずつ箇条書きで書かせ、問題点をグルーピングし、それを改善させる具体的な方法を考えさせた。そして、外国人留学生が求めているチューター指導とは何か、日本人学生にとってのチューターの意義とは何かという論点も合わせて考えさせるようにし、残り半分のチューター活動がスムーズに行えるよう促した。

以上のように、2006年度からチューター制度の改善を行ってきたが、チューター活動が留学生の学習及び生活支援として機能しているのかに対する検証が必要となる。まず、時間数に関しては、2004年度から2009年度まではチューターの最大活動時間枠が概ね40時間に設定されていた⁽⁴⁾が、2010年度からは予算の関係上チューター活動に対して謝金が支払われる時間数が段階的に減少し、2011年度からは半減している。それに伴い、チューター活動の質の低下を招くようでは留学生に対する支援としては機能していないことになる。そのため、活動時間に対するチューター活動の満足度を検証するとともに、チューターがどのような指導内容をどの程度しているのか、チューター及び留学生がチューター活動をしていく上でどのような問題点が挙げられているのかをチューター終了後のアンケート調査から見ていく。

3. 2010年度から2012年度におけるチューター制度の実施状況に関する考察

2010年度から2012年度におけるチューター制度の実施状況を指導時間数及び指導内容の面から概観し考察を行う。なお、必要に応じて前回調査した2004年度から2009年度にかけての調査と比較して論じていく。

3.1 指導時間数の変化について

表1には2010年度から2012年度にかけての渡日時チューターの指導時間数の変化が示されている。この表から協定校から来る短期の特別聴講学生(交換留学生)が増加しているにもかかわらず、渡日時チューターの留学生一人当たりのサポートの時間数が減少していることが読み取れる。これは、2010年度は一人のチューターが一人の留学生を担当してチューター活動を行っていたが、2011年度からは留学生の出身大学ごとに一人のチューターが対応することにし、数名をまとめてサポートするようにしたためである。そのため、年々、留学生一人当たりの指導時間数は減少の傾向が見られる。また、チューターとして一通り渡日時の諸手続きを経験した留学生が新たに来た留学生のサポートをすることも多いので、効率の良いチューター活動が行われていると言える。

表1. 渡日時チューターの指導時間数の変化(年度別)

	2010年度		2011年度		2012年度	
	第1学期	第2学期	第1学期	第2学期	第1学期	第2学期
チューター(名)*	14(8,6)	15(9,6)	10(5,5)	7(3,4)	7(5,2)	14(12,2)
留学生(名)	15	19	19	18	15	33
時間数(H)	241	338.5	174.5	163.5	117.5	249.5
留学生一人当たりの時間数(H/名)	16.1	17.8	9.2	9.1	7.8	7.6

*チューターの内訳として()内に日本人学生、留学生の順で記す。

表2及びグラフ1は「チューターの一人あたりの平均指導時間数」を学部別に見たものである。チューターの最大活動時間枠は予算の関係上、2010年度第1学期が40時間、2010年度第2学期が30時間、2011年度第1学期以降が20時間に設定されている。

これを見ると、研究室において研究や実験指導を行う医学部や農学部、黒潮圏海洋科学研究科、理学部がチューターの平均指導時間が長く、人文学部や教育学部、国際・地域連携センターは比較的指導時間が短くなっていることが分かる。これは、2004年度から2009年度にかけての調査と同様の傾向を示している。人文学部や教育学部では、協定校から日本語を専攻している短期留学生の受け入れが多い。日本語を学習することを目的とした交換留学生にとっては渡日直後の学内外の手続き以外の勉学面ではチューターの指導がそれほど必要ではないことから、このような状況が見られると考えられる。

しかし、全体の平均値と比較してみると、人文学部や教育学部もそれほどかけ離れておらず、理学部と人文学部は1.2時間異なるだけである。これは、2008年度にチューター制度を改善し、「チューター指導計画書」を活動前に提出させたことが影響したと考えられる。チューター指導計画書には、定期的な指導の日時と場所を設定した上で、どのような業務を行うのかをチューターと留学生が相談して決めなければならない、それに即した指導をするよう促している。そのため、一週間に1、2回定期的に会い学習指導を行わなければならないという拘束力が働き、結果的にチューター活動が活性化したと思われる。

表2. チューター一人当たりの平均指導時間数 (学部別)

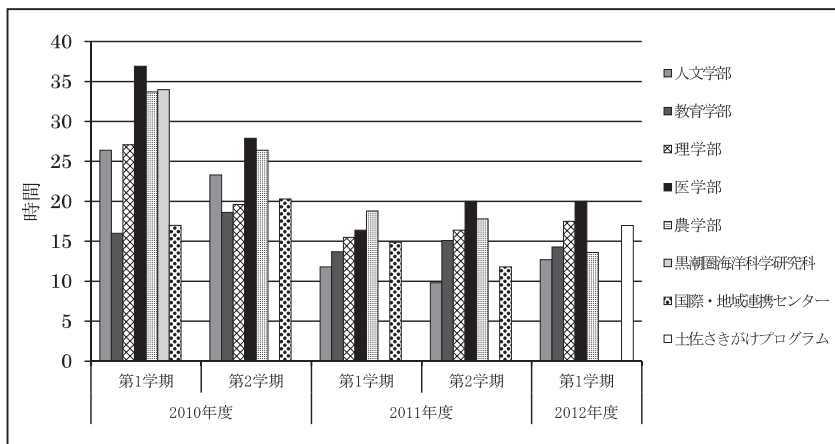
留学生の 所属学部	2010年度 (総時間数・チューター数)		2011年度*** (総時間数・チューター数)		2012年度*** (総時間数・チューター数)	平均
	第1学期*	第2学期**	第1学期	第2学期	第1学期	
人文学部	26.4 (448.5/17)	23.3 (350/15)	11.8 (176.5/15)	9.8 (88/9)	12.7 (114/9)	18.1 (1177/65)
教育学部	16.0 (192/12)	18.6 (297/16)	13.7 (205.5/15)	15.1 (226/15)	14.3 (172/12)	15.6 (1092.5/70)
理学部	27.1 (190/7)	19.6 (176/9)	15.5 (93/6)	16.4 (115/7)	17.5 (140/8)	19.3 (714/37)
医学部	36.9 (295/8)	27.9 (195.5/7)	16.4 (82/5)	20 (60/3)	20 (40/2)	26.9 (672.5/25)
農学部	33.7 (202/6)	26.4 (290.5/11)	18.8 (188/10)	17.8 (142/8)	13.6 (54.5/4)	22.5 (877/39)
黒潮圏海洋 科学研究科	34 (34/1)	—	—	—	—	34 (34/1)
国際・地域 連携センター	17 (34/2)	20.3 (61/3)	14.9 (59.5/4)	11.8 (35.5/3)	—	15.8 (190/12)
土佐さきがけ プログラム***	—	—	—	—	17 (17/1)	17 (17/1)
合計時間 (延べ人数)	1395.5 (53)	1370 (61)	804.5 (55)	666.5 (45)	537.5 (36)	19.1 (4774/250)

*2010年度第1学期は、チューターの最大活動時間枠は40時間である。

**2010年度第2学期は、チューターの最大活動時間枠は30時間である。

***2011年度第1学期以降は、チューターの最大活動時間枠は20時間である。

****土佐さきがけプログラムは、2012年度から開設されたプログラムである。



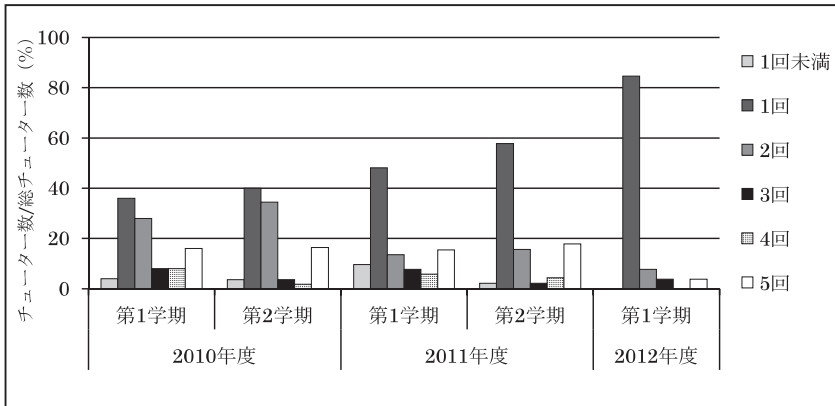
グラフ1. チューター一人当たりの平均指導時間数の推移 (学部別)

3.2 チューターの週当たりの活動回数及び時間数

表3及びグラフ2は、チューターの週当たりの活動回数を調査したものである。いずれの学期も週1度活動すると回答したチューターが最も多く、次に週に2回、週5回と続く。年度別に見てみると、最大活動時間枠がそれぞれ40時間、30時間に設定されていた2010年度第1学期と2010年度第2学期は、週1度活動している割合が4割程度であるのに対して週2度の割合が3割程度を占めている。しかし、20時間になった2011年度からは週に1度の活動が圧倒的に多くなり、2011年度第1学期は48.1%、2011年度第2学期は57.8%、2012年度第1学期に至っては84.6%を占めている。また、週に5回活動すると回答したチューターが一定の割合を占めているが、チューターの学部を見ると、実験を伴う農学部や医学部の学生であった。このことから、研究室において研究や実験指導を行う農学部や医学部では、活動時間枠内ではチューター活動が収まっておらず、かなりの時間を無償でサポートしていることが分かる。

表3. 週当たりの活動回数（チューター）

年度(人数)/回数	1回未満	1回	2回	3回	4回	5回
2010年度第1学期(50名)	2 (4.0%)	18 (36.0%)	14 (28.0%)	4 (8.0%)	4 (8.0%)	8 (16.0%)
2010年度第2学期(55名)	2 (3.6%)	22 (40.0%)	19 (34.5%)	2 (3.6%)	1 (1.8%)	9 (16.4%)
2011年度第1学期(52名)	5 (9.6%)	25 (48.1%)	7 (13.5%)	4 (7.7%)	3 (5.8%)	8 (15.4%)
2011年度第2学期(45名)	1 (2.2%)	26 (57.8%)	7 (15.6%)	1 (2.2%)	2 (4.4%)	8 (17.8%)
2012年度第1学期(26名)	0 (0.0%)	22 (84.6%)	2 (7.7%)	1 (3.8%)	0 (0.0%)	1 (3.8%)
平均	2.0 (3.9)	22.6 (53.3)	9.8 (19.9)	2.4 (5.1)	2.0 (4.0)	6.8 (13.9)

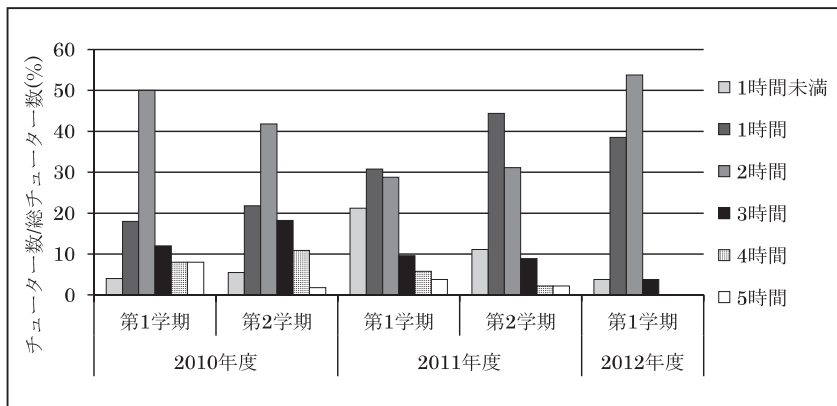


グラフ 2. 週当たりの活動回数 (チューター)

表 4 及びグラフ 3 は、チューターの週当たりの活動時間数を示している。全体を概観すると、チューターの活動時間数は週に 1 時間から 2 時間の割合が 6 割以上を占めている。しかし、2010年度は週 2 時間の活動時間数が最も多く 4 割以上、週 1 時間の活動が 2 割程度を占めているが、2011年度には逆転し週 1 時間の割合が週 2 時間の割合よりも多くなっている。また、週 3 時間以上の活動を行っているチューターは、実験指導を伴う農学部や医学部の学生であった。

表 4. 週当たりの活動時間数 (チューター)

年度(人数)/時間	1時間未満	1時間	2時間	3時間	4時間	5時間
2010年度第1学期(50名)	2 (4.0%)	9 (18.0%)	25 (50.0%)	6 (12.0%)	4 (8.0%)	4 (8.0%)
2010年度第2学期(55名)	3 (5.5%)	12 (21.8%)	23 (41.8%)	10 (18.2%)	6 (10.9%)	1 (1.8%)
2011年度第1学期(52名)	11 (21.2%)	16 (30.8%)	15 (28.8%)	5 (9.6%)	3 (5.8%)	2 (3.8%)
2011年度第2学期(45名)	5 (11.1%)	20 (44.4%)	14 (31.1%)	4 (8.9%)	1 (2.2%)	1 (2.2%)
2012年度第1学期(26名)	1 (3.8%)	10 (38.5%)	14 (53.8%)	1 (3.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
平均	4.4 (9.1%)	13.4 (30.7%)	18.2 (41.1%)	5.2 (10.5%)	2.8 (5.4%)	1.6 (3.2%)



グラフ3. 週当たりの活動時間数（チューター）

以上の結果から、チューターが留学生に週に1度会い、1時間から2時間のサポートを定期的に行っている様子がうかがえる。1学期は16週間授業があることを考慮すると、学期を通じて継続的な指導が行われていることが見受けられる。しかし、2010年度と2011年度以降を比較すると、週当たりの活動回数及び時間数が明らかに減少していることから、留学生がチューターのサポートに対して満足しているのかを検証していく必要がある。また、研究や実験指導を伴う理系のチューターに関しては、活動時間枠を超えてかなりの負担をかけていることが予想される。

3.3 チューター指導の内容

2010年度から2012年度第1学期のチューター活動がどのような内容で、どの程度行われたのかを終了時のアンケート調査から見てみる。2006年度第2学期におけるチューター指導内容の分析から、①「専門の指導」、②「日本語の指導」、③「生活上のサポート」、④「相談・話し相手」、⑤「その他」の5点が抽出されたため、この5点の活動がどの程度行われているのかを学部ごとに見ていく。

表5はチューターが回答した学部ごとのチューター活動の内容を表にまとめたものである。黒潮圏海洋科学研究科及び土佐さきがけプログラムは、チューターの指導を受けている留学生がそれぞれ1名しかいなかったため、削除してある。

表5. 2010年度～2012年度第1学期チューター指導内容(学部別) (%)

学部(人数)/内容	専門の指導	日本語指導	生活	相談相手	その他
人文学部(61)	25.7	29.1	18.8	21.7	4.3
教育学部(72)	23.5	38.4	13.8	20.9	3.3
理学部(27)	61.4	11.9	11.0	13.4	2.4
医学部(22)	46.0	14.0	20.0	18.6	1.6
農学部(31)	44.1	20.7	17.1	17.1	1.0
国際・地域連携センター(13)	23.5	39.2	9.7	23.7	3.9
平均	37.4	25.6	15.1	19.2	2.8

この表をみると、学部ごとに所属している留学生の属性が異なるため、チューター活動の内容も異なっていることが読み取れる。全体の平均としては、「専門」、「日本語」、「相談」、「生活」、「その他」の順になっている。しかし、人文学部や教育学部は正規生及び短期の交換留学生を受け入れている関係上、「専門」、「日本語」、「生活」、「相談」等それぞれの指導が満遍なく行われているが、「日本語指導」の時間に最も多くの時間がかけられ、次に「専門の指導」の割合が高いことが分かる。また、「相談」の割合も2割を占めており、日本語の話し相手としての役割も重要であることが見受けられる。一方、理学部は正規生が多く、研究や専門の指導に費やす時間が6割を占める半面、日本の生活に慣れているため「生活」や「日本語」の割合は低い。また、医学部は正規の大学院生と短期の交換留学生が多く、研究室での実験指導にける時間が大半であるが、「生活」や「相談相手」としてのチューターの役割も無視できない。農学部は正規の大学院生が大部分を占めるため、専門・実験指導に割かれる時間が最も長い、その他は「日本語」、「生活」、「相談」ともにある程度の割合を占めている。協定校から日本語を専門とする短期交換留学生を受け入れている国際・地域連携センターは、「日本語指導」、「相談」、「専門」の順になっている。これは、来日の目的が日本語の習得及び異文化交流であるため、チューターの指導内容においても日本語習得及び友人としての交流という役割が中心になっていると考えられる。

このように、学部ごとの特性はあるものの平均値を見ると、「専門」と「日本語」の指導に費やす時間が6割を超え、「生活」に費やされる時間が1.5割である。これは、入学直後の生活をサポートをする「渡日時チューター」と学期を通して学習指導を行う「個別チューター」とがある程度役割の分担

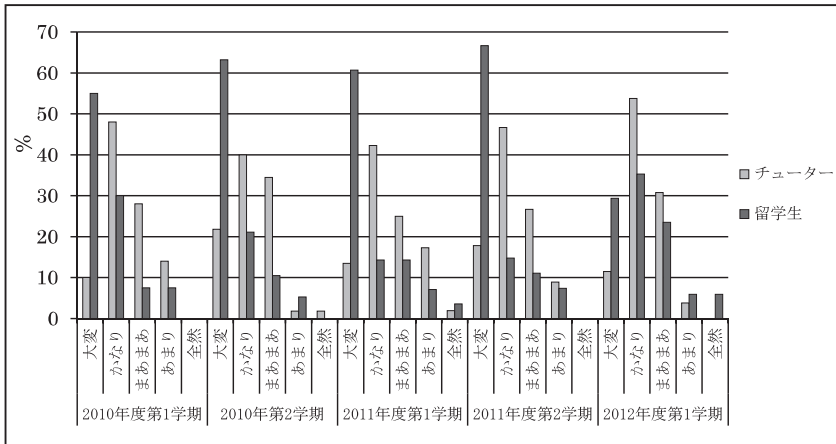
がなされ、学期を通して継続的に研究や学習のサポートが行われていることを意味している。前回の2006年度第2学期の調査では、農学部の特チーターは専門・実験指導に割かれる時間と生活上のサポートに割かれる時間がほぼ同等であり、生活上のサポートが42.7%を占めていたが、今回の調査では「専門」及び「日本語」の指導が64.8%を占め、重点が置かれていることが分かった。なお、「相談・話し相手」としての特チーターの役割は全体の平均で2割弱であり、学習や日本の生活上のアドバイスや異文化交流の面でも特チーターがサポートをしていることが見受けられる。

4. チューター活動報告書におけるチューター及び留學生の意見の考察

2010年度から2012年度第1学期にかけて同様の項目で実施されたチューター活動報告書をチューター及び留學生に分け、チューター活動における満足度及び問題点を分析していく。今回の調査では、チューター活動に対する評価として「チューター活動の満足度」の5段階評価及び「チューター活動で困ったこと、難しかったこと」の自由記述欄を対象とした。5学期間でチューター228名(回収率91.2%)、留學生150名(回収率60.0%)、合計378名分(回収率75.6%)のデータを集計したものである。

4.1 チューター活動の満足度

グラフ4を見ると、チューター活動の評価に対して、留學生の評価はチューターの評価に比べて相対的に高くなっていることが分かる。留學生の「大変満足」、「かなり満足」という肯定的な回答は8割程度を占めている。2010年度第1学期の特チーターの平均は3.54、留學生の平均は4.33、2010年度第2学期はチューターが3.78、留學生が4.42、2011年度第1学期はチューターが3.48、留學生が4.21、2011年度第2学期はチューターが3.73、留學生が4.41、2012年度第1学期はチューターが3.73、留學生が3.76であり、留學生はチューターの指導に対する満足度が相対的に高いことが明らかになった。これは、前回の2008年度第2学期から2009年度にかけての調査結果と同様の傾向を示している。チューターの評価は「大変満足」、「かなり満足」との回答が6割程度であり、やや低いのは、自己評価であるため謙遜の気持ちが働いたことに加え、留學生への指導に対して明確な達成感がなく、試行錯誤しながら活動に当たっているためだと思われる。



グラフ4. チューター活動の満足度^aの変化 (チューター・留学生)

*満足度は5「大変」、4「かなり」、3「まあまあ」、2「あまり」、1「全然」の5段階で評価している。

留学生においては満足度が「全然」の者が2名存在するが、「チューターは授業以外のことはあまり助けてくれない。チューターの仕事に対してもっと積極的になってほしい」、「今学期チューターが忙しくてあまり会わなかった。もし常にコンタクトをとると、日本語の勉強や日常生活に役立つと思う」とチューターの活動に対する感想が述べられていた。このように、チューターへの評価が低い理由としては、チューターが忙しいこと、チューターの指導内容に問題があること、チューター活動をあまり実施していないことが挙げられる。

年度ごとにチューター活動の満足度を概観すると、2012年度第1学期の留学生の満足度が若干下がってはいるが、アンケートに回答してくれた留学生数が比較的少なく多少偏った評価になった感がある。それ以外の年度に関しては、最大活動時間枠が減少した2011年度以降についても同様の満足度を示しており、活動時間数が減少してもチューター活動に対する満足度は一定の高水準を保っていると考えられる。

4.2 チューター活動の問題点

チューター活動時の問題点としては、前回の調査で抽出されたのと同様、

チューターにおいては主に表6の7点が挙げられる。

表6. チューター活動時の問題点(チューター)

問題点のカテゴリー	2010年度 第1学期 (71)	2010年度 第2学期 (79)	2011年度 第1学期 (70)	2011年度 第2学期 (48)	2012年度 第1学期 (33)	計 (308)
① 日本語指導が困難	16	22	9	8	7	62(20.1%)
② 専門のサポートが困難	5	10	8	4	3	30(9.7%)
③ コミュニケーションの成立が困難	15	16	18	7	3	59(19.2%)
④ 文化の違いによることばの理解のずれ	14	17	11	7	2	51(16.6%)
⑤ 手続きのサポートが困難	2	2	1	2	1	8(2.6%)
⑥ 時間調整の難しさ	9	7	7	6	8	37(12.0%)
⑦ 指導内容及び指導の範囲	2	2	4	4	4	16(5.2%)
⑧ なし	7	6	9	8	2	32(10.4%)
⑨ その他	1	4	3	2	3	13(4.2%)

チューターが困難に感じている点としては、主要なチューター活動として位置づけられる「日本語指導」に困難さを感じているとの回答が最も多かった。これは、人文学部や教育学部で目立ち、専門科目のレポートの添削や発表のレジュメ等の作成において間違いを直すことはできても、日本語の文法やことばのニュアンスの違いを説明することができないという問題である。

次に、「ことばによるコミュニケーション」及び「会話は成り立ったとしても文化やことばの違いから相手の考え方を理解することの難しさ」が多かった。これは、全学部で多数を占めたが、特に農学部や医学部の場合、チューター自身の英語力不足及び留学生の日本語力が低いことによるコミュニケーションの困難さに起因する。また、文化背景が違うことによる話の噛み合わなさ、ことばが理解されているのかどうかに対する不安といったこともあり、異文化間接触の中で起こる葛藤に問題を感じている様子が分かる。

さらに、「時間調整の難しさ」としてチューターが3年生である場合、就職活動で忙しかったり、他の学年でも授業時間やアルバイトの関係上チューター活動の時間を確保するのが難しく十分な時間が取れなかったりするという問題点が挙げられる。また、「専門のサポート」の困難さとしてチューターが同じ研究室の先輩であっても専門分野が異なり留学生の質問に回答できな

いといった問題や「指導内容や指導の範囲」が明確に分からず留学生に対してどのような指導を行えばよいのか悩みながらサポートしている様子がかうかかえる。なお、その他には「留学生との距離感」としてどのような距離で接すればよいのか、共通の話題作りに苦労している様も見受けられた。

表7. チューター活動時の問題点(留学生)

問題点のカテゴリー	2010年度 第1学期 (40)	2010年度 第2学期 (45)	2011年度 第1学期 (31)	2011年度 第2学期 (31)	2012年度 第1学期 (18)	計 (165)
① 専門の学習が困難	0	2	0	0	0	2 (1.2%)
② コミュニケーションの成立が困難	8	10	3	2	1	24(14.5%)
③ 文化の違いによることばの理解のずれ	3	6	4	2	3	18(10.9%)
④ 時間調整の難しさ	5	4	3	7	5	24(14.5%)
⑤ 指導内容	1	0	1	1	0	3 (1.8%)
⑥ なし	21	21	18	16	9	85(51.5%)
⑦ その他	2	2	2	3	0	9 (5.4%)

表7には留学生が感じるチューター活動時の問題点として、主に5点が挙げられている。留学生は「ことばによるコミュニケーション」及び「時間調整の難しさ」が最も多く、次に「文化の違いによることばの理解のずれ」、「指導してもらった内容」、「専門の学習」の難しさが続く。

全体を概観すると、留学生の過半数が問題なしとしたのに対し、チューターの90%が何らかの問題点を感じており、特に「日本語指導」、「ことば及び文化の壁」、「時間調整」に困難を強く感じていることが明らかになった。

5. チューター講習会における考察

チューター講習会は、2011年度と2012年度にそれぞれ1度ずつ留学生とチューターがチューター活動に慣れてきた頃を見計らって両者を対象に、チューター活動の問題点を挙げていき解決策を話し合うという内容で行われた。ここでは、チューター講習会終了時のアンケート調査から、今後の講習会のあり方について考えてみる。

2011年度にはチューターが6名、留学生が5名参加し、2012年度にはチューターが4名、留学生が9名参加した。チューター講習会はほぼ同様の内容で

行われたので、チューター10名(回収率100%)、留学生13名(回収率92.9%)分の終了時アンケートを集計しチューター講習会の効果について検証していく。アンケート調査の質問項目としては、「講習会の開催時期」、「講習会で役に立ったこと」、「チューター活動で困ったこと」、「講習会で取り上げてほしいこと」等である。

まず、チューター講習会は学期途中の第8週目に行われたが、開催時期については「適切」が20名、「適切でない」が2名、無回答が1名であった。「適切でない」は「学期のもっと早い時期」、「時間帯をもう少し遅く」との意見であり、概ね適当な時期に開催されているとの意見であった。

次に、「講習会が今後のチューター活動に役に立つか」であるが、「大いに役に立つ」が10名、「役に立つ」が10名、「あまり役に立たない」が2名、無回答が1名であり、概ね好評であったことが分かる。「役に立った内容」は、「チューター制度について考えることができ、今後のチューター活動を進めていく上で良い参考になった」が11名、「先輩チューターや他のチューター、日本人学生、留学生の悩みや考え方が聞けた」が7名、「交流が増え、新たなつながりが生まれた」が5名であった。

さらに、「チューター活動で困ったことがあるか」では7名が「ある」と回答しており、内容としては「時間調整」が4名、「指導内容」が3名、「言語や専門の指導」が2名、「交流が円滑にできない」が2名であった。その他、「担当留学生が大学に必要な最低限度の知識を身に付けており、特に何もしなくてよいと頼ってくれないこと」、「もっと交流したいので、チューター活動を延長してもらいたい」という悩みや要望が挙げられた。

「今後講習会で取り上げてほしいこと」に関しては、「そのままの内容で良い」という意見がほとんどであったが、同時に「このようなチューターと留学生が交流する場がもっとあれば良い」、「参加人数が少ないので、もっとみんなが参加できる時間帯に設定してほしい」という意見が複数あった。

以上のように、チューター講習会においてはチューターと留学生の交流を通して双方の事情や考え方等を話し合いによって理解し、今後のより良いチューター活動への礎を築くことが可能であることが終了時のアンケート調査で検証された。しかし、チューター講習会を開催してもチューター活動に興味があるチューターや留学生のみの参加に止まっているため、チューター講習会の開催方法に改善を加える必要性を感じる。そこで、来年度には、チューター講習会の参加を促すためにも留学生とチューターとの「相互理解

促進合宿」を実施することを予定している。それにより、チューター及び留学生の異文化理解が深まり、交流が促進されスムーズなチューター活動が実施されることが予想される。

6. チューター制度における今後の課題

高知大学におけるチューター制度がチューター及び留学生にとってどの程度効果があるのかをチューター活動及びチューター講習会終了後のアンケート調査を通して検証してきた。その結果、学期を通して行われる「個別チューター活動」は、入学後の生活支援として実施される「渡日時チューター活動」とは住み分けられ、人文・教育・理学部を中心に週に1、2度、1時間から2時間の学習・研究支援が定期的に行われていることが分かった。2006年度のチューター制度改善前には、一学期間に1回だけしかチューター活動を行わない者や数日間のチューター活動で全ての活動時間枠を消化するチューターが2割程度みられたが、今回の調査ではそのような傾向は見られず、それぞれのチューターがチューター活動を開始する際に提出する「チューター指導計画書」に基づき活動していることが実証された。このことから、チューター制度の運用が概ねスムーズに行われていることが見受けられる。しかし、研究や実験指導を中心にチューター活動を実施している農学部や医学部のチューターの中には、週に5回以上、3時間以上のチューター活動を行っている者もあり、学部によっては活動時間枠が少なすぎる設定になっている感も否めない。

また、2010年度当初はチューター活動時間が最大40時間であったのが、2011年度から20時間に減少された。しかし、チューター及び留学生の満足度は際立った変化がなく、留学生の方がチューターよりも高い評価を下していたことから、チューター活動の質は保たれていると考えられる。

さらに、留学生の属性によって求められているチューター活動の内容が異なるため、留学生のニーズに沿ったチューターの資格を徹底させ、チューター活動を行っていく必要があると思われる。特に、人文学部や教育学部では日本語を専攻している短期の交換留学生が多数存在するが、「日本語指導」に困難を感じているチューターが多い。チューターの資格としては、「留学生の専門と近い分野を勉強している、同じ研究室の上級学年の日本人学生または外国人留学生(原則として院生)」⁽⁵⁾がふさわしいとされているが、短期の交換留学生のチューターに関しては「人文学部で開講されている日本語教育

に関する授業を1コマ以上履修している、あるいは履修したことがある者」等の条件を付与することも考えていく時期に来ているかもしれない。また、協定校からの日本語を専門としている短期の交換留学生の場合、学部の専門の授業はほとんど受講せず日本語の運用能力も徐々に備わっていくため、渡日時の諸手続きや学習面における一学期間のチューター活動のみで事が足りるケースが多い。現に、日本における一学期間の生活の中で交友関係も広がり、二学期目にチューターをつけたところ、ほとんど活動が行われなかったといったケースも多々ある。一方、日本語・日本文化研修留学生にはチューターがつけられていないが、渡日後半年間は学習の指導を定期的に行ってほしいという声も挙がっている。このように、チューターの資格とともに留学生の属性によってチューター活動の最大活動時間数や活動時間等も検討していく必要性を感じる。また、緊急時やチューター活動期間の空白時⁽⁶⁾に大学に常時対応できるサポート要員を確保し、留学生のサポーターとして活動できるような体制作りも今後の課題として進めていきたい。

2011年度から行われたチューター講習会については効果のほどは実証されたが、チューター及び留学生の参加が少なく、両者の交流の場の拡大を希望する声が多かった。そこで、開催方法に改善を加え、より多くのチューター及び留学生が積極的に参加できるように両者の相互理解を促す合宿形式で実施することを予定している。合宿形式にすることにより、講習会への参加者の増加が図れるとともにチューターと留学生との交流が深まり、双方の異文化理解が促進され、チューターにとっては海外留学への動機づけの機会にもなり得ると考えられる。

今後も高知大学におけるさらなるチューター制度の充実を図るべく、チューターオリエンテーションや講習会においてチューター制度の意義を理解させチューターの質の確保を進めるとともに、チューター及び留学生の意見を取り入れ、よりよいチューター制度への改善及び構築を促進していく。また、日本人学生が留学生と接触することにより、自らも様々なことを学び、国際理解への関心を高める良い機会になるというチューター制度を通して今後も留学生支援及び海外留学支援の一助としていきたい。

注

- (1) 2013年2月6日(水)に行われた協議会で、Ⅰ.「留学生受入れに関する施策」について文部科学省からの説明、Ⅱ.記念講演「留学生アドバイザーの振り返りと

- ディシプリン化に向けての協働研究の提案」、Ⅲ、「留学生アドバイザーの実践と『知』」のグループ討議及び全体討論の3部構成で行われた。
- (2) 2006年度から2008年度に行われたチューター制度の改善策の詳細は、大塚薫(2009)「高知大学におけるチューター制度の現状及び課題」を参照されたい。
 - (3) 実際に、チューター登録制度は定着しており、2010年度から2012年度にかけて各学期につき5、6名のアドバイザー教員から依頼があり、当部門が仲介してチューターを選定し、チューター及び留学生、アドバイザー教員との顔合わせを実施している。
 - (4) 2004年度から2009年度までのチューターの最大活動時間枠は、2005年度第2学期が25時間、2006年度第1学期が30時間、2006年度第2学期が26時間と設定されたが、その他の学期は40時間の枠になっている。
 - (5) チューターを留学生のアドバイザー(指導)教員が選定する際には、①チューターは原則1対1で指導に当たること、②日本人学生であることが望ましい、③外国人留学生がチューターになる場合は、原則院生であること、④対象留学生が院生の場合は、同じ研究室の院生が望ましいとしている。
 - (6) チューター制度がカバーしている期間は第1学期が4月初めから8月初旬まで、第2学期が10月初めから2月初旬までであるため、空白の期間が存在している。

参考文献

- 上原徳子・竹内七奈(2012)「宮崎大学におけるチューター活動に関する考察—チューター活動後のアンケート分析より—」、『宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学』第27号、宮崎大学教育文化学部、pp. 1-20
- 大塚薫(2009)「高知大学におけるチューター制度の現状及び課題」、『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要』第4号、高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門、pp.121-138
- 河野理恵(2007)「一橋大学におけるチューター活動状況—2004年～2006年の3年間の分析—」、『一橋大学留学生センター紀要』第10号、一橋大学留学生センター、pp.49-59
- 高知大学国際・地域センター国際連携部門(2012)『外国人留学生チューターのための手引き』、高知大学国際・地域センター国際連携部門
- 瀬口郁子(1993)「神戸大学におけるチューター制度の現状と課題」、『神戸大学留学生センター紀要』第1号、神戸大学留学生センター、pp.47-60
- 瀬口郁子・塩川雅美・田中圭子・森野美紀(1997)「より好ましいチューター制度の実

- 現にむけて—質問紙による調査結果からの一考察—、『留学交流』Vol. 9 -No.10、ぎょうせい、pp.18-21
- 瀬口郁子・田中圭子(1999)「チューター制度の運用に対する提言—満足度と教育効果の観点からの一考察—」、『神戸大学留学生センター紀要』第6号、神戸大学留学生センター、pp. 1-17
- 園田智子(2008)「チューター活動における日本人学生と留学生の異文化間理解—チューター活動実施後アンケートの自由記述分析から—」、『群馬大学留学生センター論集』第8号 群馬大学留学生センター、pp. 1-11
- 千葉大学国際教育センター(2008)『留学生支援入門—伝えあう・学びあう・支えあう—』、千葉大学国際教育センター
- 福田恵理子(2010)「チューター活動における日本人学生の学び—日本人チューターと留学生のインターアクションの分析から—」、『藤女子大学紀要 第I部』第47号、pp.87-102
- マステン眞理子・松瀬成子(2006)「よりよい留学生支援体制の構築に向けて—チューター制度を考える—」、『熊本大学留学生センター紀要』第9号、熊本大学留学生センター、pp.87-107
- マステン眞理子・松瀬成子(2008)「チューター制度改定後の3年間を振り返って」、『熊本大学留学生センター紀要』第11号、熊本大学留学生センター、pp.35-50

おおつか かおる

(高知大学国際・地域連携センター国際連携部門准教授)